

弥生時代九州における銅鏡の副葬と廃棄

南 健太郎

1. はじめに

弥生時代には中国で生産された漢鏡、漢鏡の破片を利用した破鏡、漢鏡を模倣して韓半島や日本列島で製作された小形仿製鏡⁽¹⁾があり、これらの銅鏡は九州から東日本にかけての広い範囲に分布している。これまでの弥生時代銅鏡研究は日本列島への流入時期や日本列島における拡散のメカニズムの解明に力点が置かれてきた。これは銅鏡が中国大陸において年代の判明する墓から出土し、それが日本列島の弥生時代から古墳時代における年代比定の拠り所として扱われ、中国大陸からもたらされた文物が一つの墓から多量に出土する事例から銅鏡研究が当時の政治的序列や地域間関係を示すものとされてきたからに他ならない。本稿では複雑なコンテクストを経て各地にもたらされた銅鏡の出土遺構とその時期に着目し、弥生時代における銅鏡の有していた性格の一端に迫ることを目的とする。

2. 研究史と問題の所在

(1) 研究史

弥生時代の銅鏡研究には多大な蓄積があり、分類や編年、生産と流通、中国との交渉、社会的意義など多岐に渡る研究が行われている。ここではその中でも銅鏡の社会的意義についての研究状況を概観したい。

これまで弥生時代銅鏡研究を多角的に行ってきたのは高倉洋彰である。高倉の研究は漢鏡や破鏡、小形仿製鏡の生産と流通が有機的なものとして捉えられており、今日それぞれが出土する遺跡の評価にも多大な影響を与えている。高倉は前漢鏡を出土遺跡の性格、出土遺構の内容、副葬品の組合せの面から検討し、前漢鏡には弥生時代中期後半の段階に権威の象徴としての性格が付与されていたことを指摘した(高倉1993b)。また破鏡や小形仿製鏡については、後漢鏡との補完関係がみられ、前漢鏡や後漢初期の鏡が副葬される北部九州甕棺墓地域の縁辺に集中している点などから、後期後半以降の漢鏡流入の停滞に起因する絶対数の不足を補う目的をもって出現し、それらは完形後漢鏡も含め、福岡平野を中心とする旧甕棺墓社会指導下の地域的統一体内部における結合の強弱を示しているとした(高倉1972・1976)。このような高倉の一連の論考により、弥生時代の北部九州では糸島平野や福岡平野の完形漢鏡副葬墓(いわゆる王墓)を中心とし、銅鏡の配布を通じて周辺地域との結合が図られ、周辺地域においてもこれらが権威の象徴として扱われたという解釈がなされた。

高倉の論考に対して高橋徹は豊後地域における銅鏡出土遺跡の検討の中で、甕棺墓社会および周辺地域では破鏡が副葬品として用いられることから個人的所有あるいは個人的管理の強い扱いを受けており、一方で破鏡が出土する竪穴住居は中型でその中でも比較的規模の大きい一群から出土している

ことから、共同所有や共同的管理をうけた、より共同体に帰属するものとして取り扱われた祭祀品であったとした。また出土遺跡が近接していることから一平野内、一台地毎にある諸共同体群をまとめ、それらを含む大地域単位の祭祀に関する諸機能は認めないとしている。そしてこれらの銅鏡が廃棄される高橋編年Ⅲ期弥生時代後期後葉に弥生時代的なものを否定していく動き（祭祀品あるいは権威の象徴性の低下）が開始され、銅鏡の廃棄が終了する高橋編年Ⅳ期を弥生時代終末とすべきとした。（高橋1986・1992）。高橋の論考は銅鏡の意義について分布のみではなく出土遺構・出土時期の検討が行われており、周辺域と北部九州中枢との相違点を明らかにし、そこから弥生時代の終焉の姿を描き出した点は重要である。筆者も肥後地域における銅鏡の流入と廃棄の問題について検討を行ったが、肥後地域においても豊後地域とはほぼ同時期に漢鏡や小形仿製鏡が副葬・廃棄されるという傾向がみられ、北部九州への門戸となった菊池川中流域においてのみ北部九州的な銅鏡の扱われ方がみられ、この地に完形後漢鏡や多量の破鏡や小形仿製鏡が集中していることから、銅鏡拡散のセンター的機能が存在したことを想定した。また菊池川中流域以南においてはすべてが竪穴住居跡から出土するという特徴からこれが菊池川中流域の集団に起因している可能性についても触れた（南2002・2007b）。

また武末純一は弥生時代には日常的な空間である“生活の場”と非日常的な空間である“墓の場”“埋納の場”があり、この三つの場における青銅器のあり方を形式化することによって北部九州の初期農業社会の展開を明らかにしようとした。武末はこの中で前漢鏡と青銅武器をあわせもつ人物は連合体の長であり、これらはあくまで副葬用であるとした。また弥生時代後期においては完形中国鏡を頂点とした序列化が行われており、鏡片（破鏡）や小形仿製鏡は墓や祭祀遺構、生活の場からも出土することからかなり多義的な性格を有していたものと指摘している（武末1990）。

小形仿製鏡の社会的意義に関しては近年田尻義了によって新たな視点からの論考が発表されている。田尻は熊本県菊池市小野崎遺跡出土小形仿製鏡を例にあげ、一集落における多様な出土状況から「権威の象徴」として配布された様相に疑問を呈し、菊池川中流域への多量の小形仿製鏡拡散の背景に阿蘇地域と北部九州間のベンガラを中心とした交易における中間地域の安定化を図るアイテムとして機能したことを想定している。またその社会的意義については小形仿製鏡が各地域において多様な出土状況を示すことからそれぞれの地域や出土状況に応じて個別の理解が必要であることを指摘している（田尻2007）。田尻の論考は銅鏡をすべて権威の象徴として理解するのではなく、各地域における北部九州との関連性を考慮し、北部九州からの配布行為に再検討を促している点で重要である。

また高倉の破鏡や小形仿製鏡使用開始が漢鏡の不足に起因しているという指摘に対し、田崎博之は異なる視点からこの問題について検討している。田崎は鏡保有のあり方を集落、墓地において検討し、さらに単位地域内における銅鏡の分布から、銅鏡の保有者は社会的に限定されており、地域によって鏡の保有層に社会的地位の差異が認められることを指摘している。また完形漢鏡、舶載鏡片（破鏡）、小形仿製鏡には分有関係に一種の階梯が存在したことを指摘した。そしてこのような銅鏡保有のあり方から銅鏡は政治的性格が強く、銅鏡の拡散状況から銅鏡保有層の拡大をみることができるとし、舶載鏡片（破鏡）や小形仿製鏡盛行の要因をこの点に求めている（田崎1984）。

また近年辻田淳一郎が弥生時代後期から古墳時代前期の破鏡を取り上げ、破鏡の流通と完形鏡の関係について論じている。辻田は弥生時代後期から終末期においては破鏡使用の地域性が顕著であるが、古墳時代前期になると穿孔した破鏡の副葬例が増加することから、穿孔した破鏡が「非副葬」の性格をもちつつ古墳時代前期まで伝世された可能性を指摘した。そして古墳時代前期における伝世された

破鏡の一斉副葬は完形漢鏡分配システムの成立に伴い、それまで儀礼行為の場で使用された破鏡が古墳の副葬品として採用された可能性を想定している（辻田2005）。

また破鏡の出現については藤丸詔八郎が銅鏡副葬の際に故意に破碎するという破碎鏡の風習にその契機をもとめている（藤丸1993・2000）。藤丸は破鏡の形状に一定した規格がないことや同一鏡と特定できる鏡片が未確認であることから破鏡の出現には一定の規律がなかったことを指摘し、一面の銅鏡を分割して配布したことに疑問を呈している⁽²⁾。または鏡の出土状況の地域的独自性にも注意が払われており、対馬や大野川上流域などの各地域における検討が必要であることを示唆している。

（2）分析視点と方法

これまでの弥生時代銅鏡研究においては、北部九州（特に糸島平野や福岡平野）と周辺地域との間に銅鏡の種類や扱われ方の差異が存在することには注意が払われてきた。しかし諸氏が指摘するように地域によって完形鏡、破鏡、小形仿製鏡の拡散状況が異なり、扱われ方に地域的独自性が看守されることから、弥生時代における銅鏡の社会的意義を明らかにするためには地域別の様相を明らかにし、銅鏡の日本列島での拡散を掌握していたと考えられる北部九州中樞地域（糸島平野や福岡平野）との比較検討を行うことが重要であると考えられる。また田尻や筆者は破鏡や小形仿製鏡の出現時期を高倉らの論考時よりも遡らせて考えている⁽³⁾ため、その社会的意義や拡散の背景についてもあらためて検討していく必要がある。また銅鏡を媒介として弥生時代の物資流通機構の存在や各地域間の政治的な関係を考えていく場合は、完形漢鏡、破鏡、小形仿製鏡を個別のものとして扱うべきではなく、それぞれの様相を総合して検討していく必要がある。

このような問題意識を念頭に置き、本論では銅鏡が出土する遺構とその時期に着目して論を進めていきたいと思う。この点に着目することは、階層的階梯が存在すると考えられている三者の銅鏡それぞれの拡散が何を意味するのか、また漢鏡の破片の再利用である破鏡と北部九州で製作された小形仿製鏡を同列で扱ってよいのかという点についても検討を可能にする。また墓域から出土する銅鏡と集落域から出土する銅鏡の内容を明らかにすることは弥生時代社会における銅鏡の社会的意義を明らかにしていくためにも必要な視点であると考えられる。

3. 弥生時代銅鏡の出土傾向

（1）分布と出土遺構

銅鏡の出土する場所は大きく墓域からの出土と集落域からの出土にわけられる。墓域からの出土には墓への副葬品や祭祀遺構出土のものがあり、集落域からの出土には堅穴住居からの出土や溝に廃棄された状態での出土などがある。これまでの研究においては上述のように完形漢鏡は墓への副葬品、破鏡や小形仿製鏡は墓域や集落域で出土する傾向があるとされてきた。では完形鏡と破鏡、小形仿製鏡の分布の変遷についてみていこう。なお、本論では筆者が以前提示した漢鏡と小形仿製鏡の併行関係に基づいて論を進めていく（南2007 a）。第1期は三雲南小路遺跡や立岩遺跡のように前漢鏡（特に異体字銘帯鏡）を副葬する段階で、小形仿製鏡は韓半島で製作された初期のものである。弥生時代中期後葉。第2期は前漢後半から後漢初頭の方格規矩四神鏡などの段階で、北部九州で小形仿製鏡が生産開始された段階。弥生時代後期前葉。第3期は後漢中期までの長宜子孫内行花文鏡などが流入し、小形仿製鏡は縁幅の広いものが製作される段階。弥生時代後期中葉。第4期は後漢後半の鏡群が流入する段階で、小形仿製鏡は二重弧線の内行花文帯を表出する段階。弥生時代後期後葉。そして列島に



第 1 期



第 2 期



第 3 期



第 4 期

第 1 図 完形漢鏡分布の変遷

岡村編年漢鏡7期鏡群（斜縁神獸鏡や画文帯神獸鏡）が流入する段階を第5期とする。

a. 完形漢鏡（第1図）

弥生時代においては中期後葉から後期終末まで完形漢鏡は基本的に副葬品として用いられている⁽⁴⁾。漢鏡の副葬は先学諸氏によって明らかにされてきたように、重圏彩画鏡や異体字銘帯鏡が副葬された福岡県前原市三雲南小路1号甕棺墓及び草葉文鏡や異体字銘帯鏡が副葬された須久岡本遺跡D地点墓のような中期後葉の甕棺副葬に始まる。完形漢鏡副葬墓の分布は第1期から第2期にかけて糸島平野や福岡平野を中心にみられ、第3期には対馬や筑後川流域、第4期には菊池川流域にまで広がっている。つまり時期が下るにつれて完形漢鏡の拡散範囲が拡大していく様子がみられるのである。ここで問題となるのが第4期は分布が拡大するが、それまで完形鏡副葬墓が濃密に分布していた糸島平野や福岡平野において完形鏡副葬墓が減少する点である。逆にそれまで少数ではあるが完形漢鏡が継続してみられた東北部九州に濃密な分布がみられるようになる。そして続く第5期においては明確な分布がみられなくなる⁽⁵⁾。

b. 破鏡（第2図）

次に破鏡についてみていきたい。破鏡はこれまで墓のみではなく集落域からも出土することが指摘されてきた。破鏡の出土場所としては約7割が集落域からの出土である。注目すべき点としては完形漢鏡を大量に保有していたと考えられる糸島平野においても破鏡がみられる点である。糸島平野には第1期の三雲南小路遺跡、第2期の井原鍵溝遺跡、第3期の井原ヤリミゾ遺跡と継続して多量の完形漢鏡を保有していた地域である。この地域にも破鏡が存在し、墓の副葬品としても用いられている点は、破鏡の性格を考える上で非常に重要である。また破鏡の副葬が最も早く行われるのは佐賀平野である。佐賀平野においては第2期にもたらされた破鏡が副葬品として用いられている。破鏡拡散の時期的変遷をみると、第1期は肥後地域のみであるが、第2期は第1期もしくは第2期に完形漢鏡がもたらされる地域にほぼ限定されている。第3期は銅鏡分布の拡大期であるが、北部九州一帯に加え肥後地域や豊後地域といった周辺地域にまで拡散するようになっていく。また第4期にも継続して周辺地域へ多くの破鏡が拡散しており、北部九州中枢部には少ない。第4期の状況は完形漢鏡と同様な状態を示している。

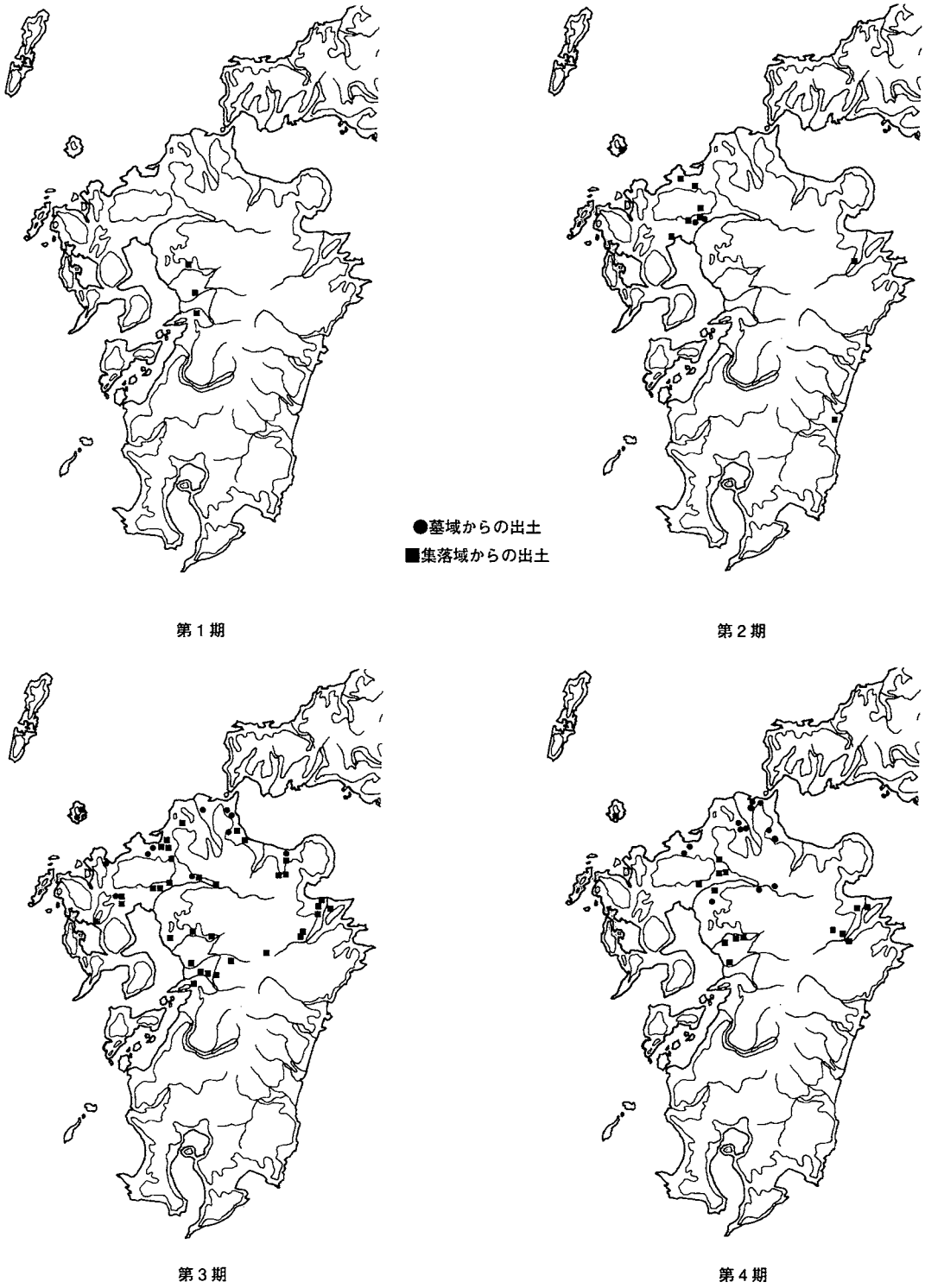
破鏡が副葬品として用いられる地域は第1期に完形漢鏡が拡散した地域にほぼ限定されており、その他には完形漢鏡分布地域と地理的に接した日田盆地や豊前地域や、北部九州製品の南への拡散の窓口であったと考えられる菊池川中流域にみられる。

c. 小形仿製鏡（第3図）

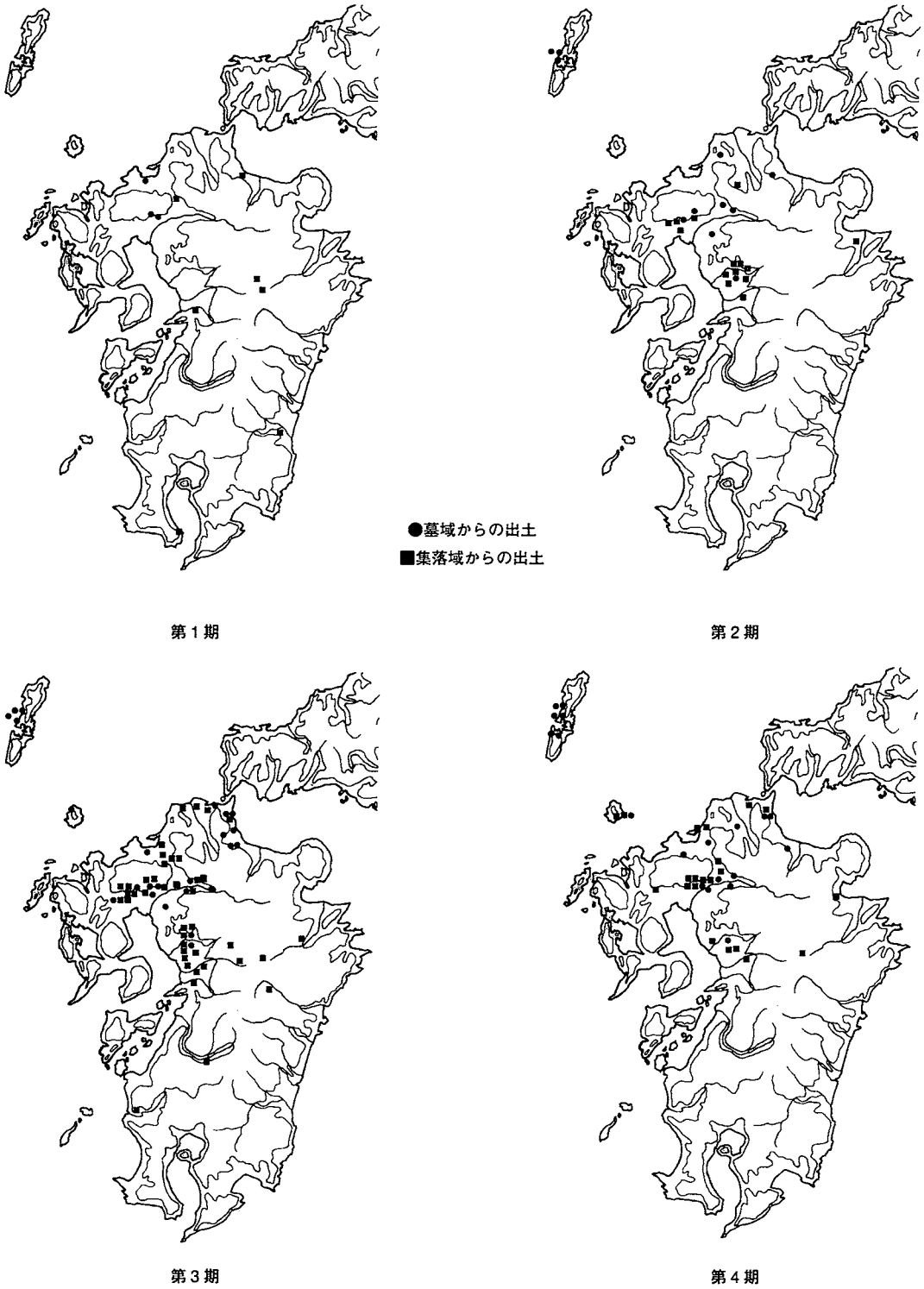
小形仿製鏡についてはこれまで破鏡と同様な意義付けがなされてきた。小形仿製鏡も6割が集落域からの出土である。しかし小形仿製鏡はその初期段階においては福岡県福岡市有田遺跡ST002甕棺や佐賀県神崎市二塚山遺跡46号甕棺墓で前漢鏡や後漢鏡と同じ墓域から出土しており、この点では完形漢鏡に次ぐ存在であったことが考えられる。また小形仿製鏡が副葬される地域には必ず完形漢鏡の副葬がみられる。このことから小形仿製鏡の副葬は完形漢鏡副葬と同様な背景が存在していたものと考えられる。このことは肥後地域においては完形鏡の存在する菊池川中流域のみに小形仿製鏡の副葬がみられることから肯定しよう。

(2) 副葬・廃棄と出土遺構の時期

上記のように完形漢鏡、破鏡、小形仿製鏡の時期的な動向はそれぞれ共通する部分と異なる部分が



第2図 破鏡分布の変遷



第3図 小形仿製鏡分布の変遷

あることがわかる。では次にそれぞれが出土する遺構の時期をみてみよう。これはそれらが各地域に拡散したあとどのようなプロセスで副葬、もしくは廃棄されるに至るのかという問題を考える上で重要であり、銅鏡保有の意義を追及するためにも必要な作業である。

第1期の完形漢鏡はすべて副葬品として用いられており、中期後葉の甕棺からの出土である。このことは第1期の完形漢鏡が北部九州に流入し、各地に拡散後、期間をおかず副葬されたことを示している。しかしこの状況は第2期以降の完形漢鏡副葬墓において変化がみられる。第2期には新たに豊前地域へ完形漢鏡の拡散がみられ、福岡県京都郡みやこ町徳永川ノ上遺跡においては第2期から第5期まで継続して破鏡や完形漢鏡がもたらされている。これらの銅鏡には著しい摩滅がみられ、すべて弥生時代終末の墳丘墓に副葬されている(柳田編1996・1997)。また東北部九州においては第3期に拡散した完形漢鏡がやはり弥生時代終末の墓に副葬されるという傾向がある。一方、第1期に完形漢鏡が副葬された地域においては拡散後期間を置かず副葬品として用いられる。これらの地域では第2期・第3期の完形漢鏡がそれぞれ後期前葉・後期中葉に副葬されている。第4期においては完形漢鏡が周辺域に分布することは先に述べたが、第5期の分布はこれがさらに顕著になる。周辺域ではこの時期に入手した完形漢鏡はすぐに副葬品として用いられる。つまり第4期において完形漢鏡の拡散形態が変化し、このことと周辺域が銅鏡副葬を開始する時期が重複してくるのである。

破鏡の副葬と廃棄に関しては完形漢鏡の動向とあわせてみてみよう。破鏡使用が開始される第1期は肥後地域にのみ破鏡がみられる。この時期の完形漢鏡が北部九州ではすべて副葬品として用いられているのに対して肥後地域では集落からの出土であり、出土遺構の時期は後期前葉から中葉と考えられ、北部九州の副葬時期からはやや遅れる。しかし権威の象徴と考えられる前漢鏡の破片を他地域に先駆けて入手していることから、肥後地域がこの時点で銅鏡を必要としていた可能性を指摘することができる。第2期の破鏡は墓への副葬と集落への廃棄がみられる。副葬されるのは佐賀平野においてのみであるが、佐賀平野においては集落への廃棄もみられる。このことは第2期において前漢鏡副葬地域内部においても銅鏡の扱われ方に差異が生じたことを意味している。またこの時期には豊後地方にも破鏡がもたらされている。このような時期に銅鏡の扱われ方に差異が生じている点は注目すべきである。第3期には福岡平野でも墓への副葬事例がみられるようになり、周辺域においても副葬事例が増加する。また福岡平野においては第3期に入手した破鏡を集落へ廃棄するようになるが、他地域ではほとんどの破鏡が後期後葉から終末まで廃棄されない。第4期には他地域においても破鏡入手後に長期保有せずに副葬や廃棄するようになる。この時期は完形漢鏡副葬墓が北部九州中枢で減少する時期であり、破鏡の副葬についても完形漢鏡の副葬に準じた扱いが行われたものと思われる。このことから北部九州中枢から他地域へと拡散した完鏡や破鏡の意味づけが変化していったものと考えられる。

では小形仿製鏡の副葬と廃棄の状況はどうであろうか。第1期における小形仿製鏡は韓半島東南部で製作されたもので、漢鏡と同様に貴重な舶載製品として扱われたものと思われる。北部九州中枢では前漢鏡副葬墓と同じ墓地に埋葬された墓への副葬品として用いられており、これが完形漢鏡に準ずる副葬品であったことは想像に難くない。また周辺域ではこれらは廃棄されることとなるが、前漢鏡副葬墓の存在する福岡平野南部の福岡県筑紫野市御笠遺跡群においても集落への廃棄が行われている。第2期には北部九州で小形仿製鏡の生産が開始され、分布域も大きく拡大する。この時期の完形漢鏡や破鏡は副葬される場合は拡散後すぐに行われるがその他の場合には長期間保有されることとなる。

この状況は小形仿製鏡も同様である⁶⁾。また副葬品として用いられるのは対馬と前漢鏡副葬地域周辺に限られている。そしてここでもいえることは集落へ廃棄される事例はおしなべて第4期（後期後葉から終末）であることを指摘することができる。第4期には肥後地域でも小形仿製鏡の副葬が行われるようになる。これは完形漢鏡の肥後地域への流入と前後する時期で、このときに完形漢鏡の扱われ方や北部九州的な廃棄状況などが伝播した可能性があり、その後集落への廃棄がおこなわれたと考えられる。

4. まとめ

弥生時代には中国から漢鏡が日本列島にもたらされ、北部九州では完形鏡の鏡片を再利用した破鏡が盛行し、漢鏡をモデルに小形仿製鏡が製作された。このことから、拡散形態や扱われ方などを検討する際はこれらの関連性を考慮する必要がある。本論ではこのような点に留意しながら完形漢鏡を中心に破鏡や小形仿製鏡を含めて出土遺構や遺構の時期について検討してきた。

第1期においては完形漢鏡の副葬が開始され、その分布や甕棺への副葬状況から完形漢鏡をメルクマールとした強固な地域間関係が結ばれていたものと考えられる（高倉1993b）。多量の前漢鏡を副葬した三雲南小路1号甕棺や須久岡本D地点墓には大型鏡が揃っており、柳田がいうように三雲南小路1号甕棺と立岩遺跡35号甕棺に同型鏡が存在すること（柳田2002）からもこのことは肯定されるであろう。また完形漢鏡をこのように考えると、第1期の破鏡の性格も政治的色彩が強いものであったと考えられる。当該期の破鏡が出土した菊池川中流域には第2期から第4期にかけて韓国出土鏡と同范の小形仿製鏡や完形後漢鏡が拡散しており、九州の中でも非常に重要視されていた地域であったと考えられる。また破鏡が廃棄される時期が後期前葉から中葉であることは北部九州製小形仿製鏡の流入が廃棄の契機になった可能性もあろう。

第1期の完形漢鏡拡散にみられた北部九州における地域間関係は第2期にも継続していたようで、完形漢鏡の分布は第1期に重複するかのようである。しかし第2期に新たに完形漢鏡を入手した地域ではすぐには副葬されない傾向がみられ、弥生時代後期後葉から終末にそれまでに入手した完形漢鏡を副葬するようになる。また破鏡についても佐賀平野の事例では副葬する場合と集落へ廃棄される場合があり、破鏡の扱われ方には注意が必要である。この傾向は小形仿製鏡についても同様である。しかしここで注意しなければならない点は副葬される地域は第1期の完形漢鏡副葬墓の周辺や対馬という特殊な条件にある地域である。第2期には糸島平野や福岡平野からも破鏡が出土していることから、破鏡の流通形態については一箇所からの拡散というよりもいくつかの有力集団からの拡散の可能性も想定しておいたほうがよいのかもしれない。今後の課題である。

第3期になるとそれぞれ大幅に分布域を拡大させるが、完形漢鏡の副葬状況をみるとやはり第1期に完形漢鏡を副葬した地域では入手後まもなく副葬品として用いられ、他地域においては後期後葉から終末まで長期間保有される。一方、第3期は小形仿製鏡の生産がピークを迎える時期にあたり、青銅器生産の中心地である須玖遺跡群以外でも多様な製品が生産されている（田尻2004）。小形仿製鏡は周辺地域において拡散後まもなく副葬品として用いるという、それまで完形漢鏡副葬地域にしかみられなかった副葬状況がみられるようになる。つまり第3期においてそれまで長期間保有することに意義があったと考えられる銅鏡の意義が少なからず変容したようである。破鏡副葬の拡大がみられるのもこの時期であり、田崎が論じた銅鏡保有者層の拡大（田崎1984）に伴うものであると考えられる。

第4期は糸島平野や福岡平野において完形漢鏡副葬墓が減少する。第4期に周辺地域に拡散した完形漢鏡を含む銅鏡は、それまでに入手していた銅鏡とともに副葬、あるいは集落へ廃棄されるようになる。小形仿製鏡の生産・流通においては、第4期は集約化されたことが指摘されている（田尻2004）が、単位地域内においてもそれまでとは異なる拡散形態がみられる（南2007b）ことから、小形仿製鏡の生産・流通の担い手であった福岡平野や、中期後葉以来卓越した質・量の漢鏡を保有してきた糸島平野を中心とした北部九州の地域間結合に何らかの変化が生じたのではないかと思われる。

以上、完形漢鏡、破鏡、小形仿製鏡の検討から弥生時代中期後葉から後期後葉における北部九州を中心とした地域間関係について検討してきた。今回の検討では出土遺構の詳しい分析や各遺跡の所属時期など明らかにしえなかった部分が多い。今後は出土状態や使用状況から当該期の銅鏡に付された社会的意義や北部九州の地域間結合の具体像について検討していきたいと思う。また九州の事例を他地域や韓国などの事例と比較検討することで完形漢鏡、破鏡、小形仿製鏡の拡散を東アジアという大きな枠組みの中で捉えなおしていきたいと思う。

註

- (1) 弥生時代小形仿製鏡の製作地は初期のものについて韓半島製（梅原1959、高倉1972・1985・1993a、小田1982）と北部九州製（田尻2003・2007）という見解がある。筆者は初期小形仿製鏡の鈕孔製作方法から韓国慶州市漁隱洞遺跡や韓国大邱市坪里洞遺跡出土の蕨手文を文様の主体とする一群を韓半島東南部製、熊本県五丁中原遺跡や広島県真亀C遺跡出土の異体字銘帯鏡を忠実に模倣したものや北部九州で鑄型が出土している一群を北部九州製と考えている（南2005・2007c）。
- (2) 破鏡の分割配布については森貞次郎（森1985）、高橋（高橋1992）、辻田（辻田2005）も否定的であり、鏡片の状態で船載された可能性を指摘している。
- (3) 高倉の論考では北部九州での小形仿製鏡の生産開始を後期中頃から後半としているが、田尻や筆者の小形仿製鏡の編年では北部九州での生産開始を後期初頭としている（田尻2004、南2007a）。また破鏡についても筆者は前漢鏡の段階から存在していたものと考えている（南2008）
- (4) 佐賀県佐賀市柴尾橋下流遺跡では第3期の四葉座内行花文鏡I式が溝跡から出土している。
- (5) ここで注目されるのが福岡県前原市平原遺跡1号墓である。平原遺跡1号墓からは超大型仿製内行花文鏡や方格規矩四神鏡など40面の完形鏡が出土している。平原遺跡出土鏡については仿製鏡か船載鏡かという問題があるが、第4期から第5期にかけてみられる糸島平野の完形鏡減少傾向と平原遺跡に集約された40面の銅鏡を無関係であるとは考えられない。
- (6) ただし佐賀平野や豊前地域では第2期の破鏡や小形仿製鏡が後期後半から終末に副葬される例があるため、今後各地域における詳細な変遷の検討が必要である。

参考文献

- 梅原末治 1959「上古初期の仿製鏡」『国史論集』（一） 読史会
 小田富士雄 1982「日・韓地域出土の同範小銅鏡」『古文化談叢』第9集 九州古文化研究会
 高倉洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第3号 日本考古学会
 1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2 九州歴史資料館
 1985「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻第3号 日本考古学会
 1993a「弥生時代仿製鏡の製作地」『季刊考古学』第43号 雄山閣
 1993b「前漢鏡にあらわれた権威の象徴性」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第55集 国立歴

史民俗博物館

- 高橋徹 1986「廃棄された鏡片—豊後における弥生時代の終焉—」『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会
- 1992「鏡」『菅生台地と周辺の遺跡』XV 竹田市教育委員会
- 武末純一 1990「墓の青銅器、マツリの青銅器—弥生時代北九州例の形式化—」『古文化談叢』第22集 九州古文化研究会
- 田崎博之 1984「北部九州における弥生時代終末前後の鏡について」『史淵』第121輯 九州大学文学部
- 田尻義了 2003「弥生時代小形仿製鏡の製作地—初期小形仿製鏡の検討—」『青丘学術論集』第22集 財団法人韓国文化研究振興財団
- 2004「弥生時代小形仿製鏡の生産体制論」『日本考古学』第18号 日本考古学協会
- 2007「弥生時代小形仿製鏡の保有者と使用方法」『古代文化』第59巻第1号 古代学協会
- 辻田淳一郎 2005「破鏡の伝世と副葬—穿孔事例の観察から—」『史淵』142 九州大学大学院人文科学研究科
- 藤丸詔八郎 1993「破鏡の出現に関する一考察—北部九州を中心として—」『古文化談叢』第30集（上）九州古文化研究会
- 2000「後漢鏡について」『古墳発生前後の社会像—北部九州及びその周辺地域の地域相と諸問題—』九州古文化研究会
- 南健太郎 2002「青銅鏡」『石川遺跡』植木町文化財調査報告書第14集 植木町教育委員会
- 2005「弥生時代小形仿製鏡の鈕および鈕孔製作技術—その技術と系譜に関する予察—」『鏡範研究』Ⅲ 奈良県立橿原考古学研究所・二上古代鍍金研究会
- 2007 a 「弥生時代九州における漢鏡の流入と小形仿製鏡の生産」『熊本大学社会文化研究』5 熊本大学大学院社会文化科学研究科
- 2007 b 「肥後地域における銅鏡の流入とその特質」『肥後考古』第15号 肥後考古学会
- 2007 c 「韓半島における小形仿製鏡の生産—製作技術からみた初期弥生時代小形仿製鏡の製作地—」『韓半島における青銅器製作技術と東アジアの古鏡』国立慶州博物館・奈良県立橿原考古学研究所・アジア鑄造技術史学会
- 2008「前漢鏡の破鏡とその拡散形態—破鏡に施される二次加工の検討から—」『王権と武器と信仰』同生社
- 森貞次郎 1985「弥生時代の東アジアと日本」『稲と青銅と鉄』日本書籍
- 柳田康雄 2002「伊都国の対外交渉のはじまり」『九州弥生文化の研究』学生社
- 柳田康雄編 1996『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書第7集 福岡県教育委員会
- 1997『徳永川ノ上遺跡Ⅲ』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書第9集 福岡県教育委員会

The burial and abandonment of bronze mirror in Kyusyu at the Yayoi period

MINAMI Kentaro

In the Yayoi period, There was a complete form Han mirror , broken mirror and small imitative mirror. Complete form Han mirror was a symbol of the authority and broken mirror and imitative mirror was a symbol of the combination between North Kyusyu and other area. The author thinks the social significance of these bronze mirrors was different by an area and the time, examined of paid my attention in the structural remains and at that time. Complete form Han mirror was distributed over the limited area of North Kyushu from the first to the second, enlarge the distribution area from the third, spread to the fourth in Middle Kyushu. All is almost used for these as grave goods. Distribution escalates broken mirror and imitative mirror in the third from North Kyushu to Middle Kyushu and East Kyushu, and burial the abandonment are performed. At the time of burial and abandonment supports the change of the diffusion form from North Kyusyu, and originality is seen in each area. The area where complete form Han mirror is distributed over at the first, bury after spread immediately, other area hold it to latter period end in the Yayoi period. Broken mirror and imitative mirror was buried immediately the case of used as grave goods, when that was disposed, that was held for a long term. In the third, broken mirror and imitative mirror come to be buried in the other area of buried complete form Han mirror at the first. This means social significance of the bronze mirror changed when the distribution of the bronze mirror spreads greatly. In the forth, at the outskirts area ,bronze mirror which held for a long term come to be buried and disposed. At that time thought that some kind of changes occurred in the combination between north Kyushu and neighboring local areas.